

ニュース記事で描かれる人物像に関する探索的調査

金 田 宗 久* 岡 本 真一郎*

本研究は、ニュース記事で示された人物が受け手によってどのように理解されるかを検討した。103名の参加者に対して、氏名、国籍、職業などの個人情報に不明確になるように編集された望ましさの異なる2種類の記事を提示した。その後、記事内容に関する項目への評価を求め、記事で示された人物にあてはまる国籍および職業を選択させた。その結果、国籍に関しては、事象の望ましさに関わらず「日本」国籍が多く選択されたが、日本以外の外国籍のみに注目すると、事象の望ましさによって選択される国籍に違いがみられた。職業に関しても記事の望ましさによって選択される職業に違いがみられた。これら国籍および職業の選択傾向の違いについて論じた。

Keywords: news stories, characters, nationalities, occupations, stereotype

問 題

われわれの日常生活には、テレビをはじめ新聞、雑誌、ラジオ、インターネットといった多様なメディアが存在する。特にテレビは、他のメディアと比べ各世代での利用者数が多い。さらに、テレビへの1日あたりの接触率は国民全体で8割以上である(諸藤・渡辺, 2011)。また、ユビキタス社会が展開される今日、われわれの生活へのインターネットの普及は著しい。インターネットは、パソコンだけでなく携帯端末、とりわけ国民の所持率が高い携帯電話からも利用可能である。これによって、情報の受け手は時間や場所に制限されず、さまざまな情報を獲得できるようになった。それぞれのメディアの特性に着目すると、伝達される情報の質や量、速報性などに差はみられるが、政治、経済、事件・事故、娯楽・趣味など幅広い情報が伝達されるという点にメディア全体の有用性があると考えられる。

しかしながら、われわれを取り巻いているメディアから伝達される情報の全てが同等な評価を受けているわけではない。例えば、ニュースメディアとしての信頼性に関わる評価では、NHKのニュース番組、新聞、民間放送のニュース番組、ワイドショーの順に低く、受け手はNHK以外のテレビから伝達されるニュース

にあまり信頼を寄せていない(萩原, 2007)。また、どのメディアを日常よく利用するかは受け手によって異なるのも事実である。テレビを除くメディアの世代間での利用者数を比較すると、近年インターネットの利用は各世代において全体的に増加しているものの、なお若い世代に偏っている傾向がみられる。それとは逆の傾向として新聞やラジオは若年層の利用者が少ないことが明らかになっている(萩原・小城・村山・大坪・渋谷・志岐, 2010; 諸藤・渡辺, 2011)。このような現状は、各種メディアの影響を個別に検討するうえで考慮されるべき点であると考えられる。だが他方では、マスメディア全体に共通する問題として、過度な報道による人権やプライバシーの侵害、ヤラセの問題といった報道のあり方がしばしば取り上げられる(川上, 1994)。

マスメディアによる受け手への影響については、これまでさまざまなアプローチがとられてきた。例えば、テレビで描かれた人物による行動の観察学習に注目した「社会的学習理論 (social learning theory)」, 繰り返し伝達される情報によって視聴者の世界観や社会的現実に影響を及ぼす点に注目した「培養理論 (cultivation theory)」, 受け手が既有知識を利用しながらその情報を処理する点に着目した「スキーマ理論 (schema theory)」などがある(岡林, 2009)。

*愛知学院大学心身科学部心理学科
(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: m-kaneda@dpc.agu.ac.jp

本研究では、スキーマの一種として考えられるステレオタイプ (stereotype) を取り上げ、ある事象と社会集団や社会的カテゴリー (e.g., 性別, 人種) との関連づけについて探索的に検討する。ステレオタイプとは、ある社会集団や社会的カテゴリー (e.g., 性別, 人種) に関する一般化された固定観念である。社会心理学における初期のステレオタイプ研究では、「チェック・リスト法」を用いたステレオタイプの内容に関する検討が行われてきた (原谷・松山・南, 1959; Katz & Braly, 1933)。例えば、「イタリア人」に対して「情熱的」といった特性語がよく当てはまることが示され、これをステレオタイプの内容としている。これに対して、本研究においては、望ましい事象に関する記事および望ましくない事象に関する記事を提示し、それらの記事に登場する人物の国籍と職業としてあてはまるものを選択させるという手法をとり、それぞれの事象におけるステレオタイプのイメージについて検討する。

方 法

参加者 大学生103名 ($M=21.01$ 歳, $SD=.79$)。性別の内訳は、女性68名, 男性33名, 不明2名であった。

刺激文 朝日新聞オンライン記事データベース (聞蔵Ⅱビジュアル) および中日新聞・東京新聞記事データベースより望ましい事象 (e.g., ボランティア活動, 人命救助) に関する記事 (以下, 「ポジティブな記事」) および望ましくない事象 (e.g., 殺人, 傷害) に関する記事 (以下, 「ネガティブな記事」) を、それぞれ5件ずつ選択した (Table 1)。その後、それぞれの記事

における登場人物の個人情報 (i.e., 氏名, 国籍, 職業) が不明瞭になるように記事を編集した。ポジティブな記事とネガティブな記事の中からそれぞれ1件ずつ計2件を参加者に対して提示した。ポジティブな記事とネガティブな記事の提示順序については、参加者間でカウンターバランスをとった。

質問項目 提示された刺激文の記事の内容あるいは事象に関する項目として、記事を読んで感じた快不快の程度 (1: 非常に不快~7: 非常に快), 内容の理解のしやすさ (1: 非常に理解しにくい~7: 非常に理解しやすい), 事象が社会において重要なことと思われる程度 (1: 全く重要でない~7: 非常に重要である), 事象の望ましさ (1: 全く望ましくない~7: 非常に望ましい), 類似した事象の社会における生起頻度 (1: ほとんどない~7: かなりある) の計5項目についてすべて7件法で回答を求めた。さらに、記事で描かれた人物のイメージに関する項目として、人物像にあてはまると思われる国籍および職業を多肢選択式 (3つまで選択) で回答を求めた。国籍については、「ドイツ」「フィリピン」「日本」「韓国」「ロシア」「オーストラリア」「アメリカ」「イギリス」「マレーシア」「中国」「ブラジル」「その他」の計12の選択肢が設けられた。職業については、「会社員」「フリーター」「飲食店従業員」「学生」「無職」「土木作業員」「運転手・運転士」「飲食店経営者」「教員」「警察官」「弁護士」「専業主婦」「その他」の計13の選択肢が設けられた。

手続き 参加者のペースで提示された刺激文をよく読み、すべての項目に回答するよう求めた。

Table 1 刺激文として選定された記事 (原文) の見出し

記事 No.	見出し
1	中国 親の服役中 親代わりに
2	阪神大震災 被災地救援 続くボランティア活動 在日外国人も奮闘 草の根協力進む
3	自殺寸前「待った!」 2 高校生が説得, 男性保護 万場大橋
4	火事の民家へ勇気の2人 寝たきり病人を救出 お手柄金子さん, 広江さん 各務原
5	韓国人留学生お手柄 東京・JR 新大久保駅 線路転落の女性救う
6	2 警官, 外国人に撃たれ負傷 白昼, 歌舞伎町で職質中 2人逮捕
7	ロシア人女性を窃盗の罪で起訴 新潟のコンテナ他殺体 新潟県
8	友人を刺殺 名古屋で容疑者逮捕
9	覚せい剤5万錠 密輸図った疑い 関空で2外国人逮捕
10	22歳女性殺害 奈良, 知人男逮捕

Note: 記事 No. 1~5 は望ましい事象, 記事 No. 6~10 は望ましくない事象として選定した。

結 果

ポジティブな記事に対する評価 ポジティブな記事それぞれに対する評価平均値および標準偏差を Table 2（上段）に示す。事象の望ましきについて記事の種類（5水準）の1要因分散分析を行なった結果、有意な差は認められなかった（ $F(4, 98)=1.36, n.s., \eta^2=.05$ ）。記事を読んで感じた快—不快の程度について記事の種類（5水準）の1要因分散分析を行なった結果、記事の種類による有意な差がみられた（ $F(4, 98)=2.48, p<.05, \eta^2=.09$ ）。Gabriel 法による多重比較の結果、記事 No. 2（ $M=4.19, SD=1.33$ ）と記事 No. 5（ $M=5.25, SD=1.07$ ）の間で差が認められた（ $p<.05$ ）。

次に記事内容の理解のしやすさについて1要因分散分析を行なった結果、記事の種類による差が認められ（ $F(4, 98)=2.72, p<.05, \eta^2=.10$ ）、記事No. 2（ $M=4.95, SD=1.20$ ）より記事 No. 3（ $M=6.00, SD=.82$ ）のほうが理解しやすかった（ $p<.05$ ；Gabriel 法）。事象が社会において重要なことと思われる程度について1要因分散分析を行なった結果、記事の種類による差は認められなかった（ $F(4, 98)=1.93, n.s., \eta^2=.07$ ）。類似した事象の社会における生起頻度について1要因分散分析を行なった結果、記事の種類による有意な差は認められなかった（ $F(4, 98)=1.94, n.s., \eta^2=.07$ ）。

ポジティブな記事としての妥当性を確認するため、事象の望ましきについて記事の種類を区別せず、1サンプルの t 検定を行なった。その結果、望ましきの程度において中点との有意な差がみられ（ $t(102)=9.36, p<.001$ ；両側検定）、全体的に望ましい内容の記事であると判断されていた（ $M=5.31, SD=1.42$ ）。

ネガティブな記事に対する評価 ネガティブな記事それぞれに対する評価平均値および標準偏差を Table 2（下段）に示す。事象の望ましきについて記事の種類（5水準）の1要因分散分析を行なった結果、有意な差は認められなかった（ $F(4, 98)=1.92, n.s., \eta^2=.07$ ）。記事を読んで感じた快—不快の程度について記事の種類（5水準）の1要因分散分析を行なった結果、記事の種類による差は認められなかった（ $F(4, 98)=0.44, n.s., \eta^2=.02$ ）。

次に記事内容の理解のしやすさについて1要因分散分析を行なった結果、記事の種類による差は認められなかった（ $F(4, 98)=1.14, n.s., \eta^2=.04$ ）。事象が社会において重要なことと思われる程度について1要因分散分析を行なった結果、記事の種類による差はみられなかった（ $F(4, 98)=0.48, n.s., \eta^2=.02$ ）。類似した事象の社会における生起頻度について1要因分散分析を行なった結果、記事の種類による有意な差が認められた（ $F(4, 98)=5.64, p<.001, \eta^2=.19$ ）。Gabriel 法による多重比較の結果、記事 No. 6（ $M=4.13, SD=1.33$ ）に比べ記事 No. 9（ $M=5.61, SD=1.23$ ）や記事 No. 10（ $M=5.71, SD=0.96$ ）に類似した事象が社会において高い頻度で生じていると評価された（いずれも、 $ps<.01$ ）。また、記事 No. 8（ $M=4.47, SD=1.61$ ）より記事 No. 10の事象の生起頻度が高いと評価された（ $p<.05$ ）。

ネガティブな記事としての妥当性を確認するため、事象の望ましきについて記事の種類を区別せず、1サンプルの t 検定を行なった。その結果、望ましきの程度において中点との有意な差がみられた（ $t(102)=-18.30, p<.001$ ；両側検定）。本調査で用いたネガテ

Table 2 刺激文ごとにみた各評価項目における平均値および標準偏差

記事 No.	事象の望ましき	快—不快	理解のしやすさ	社会における重要性	事象の生起頻度
1	5.12 (1.54)	4.88 (1.32)	5.47 (1.01)	5.47 (1.42)	3.29 (1.49)
2	4.95 (1.43)	4.19 (1.33)	4.95 (1.20)	5.14 (1.15)	4.14 (1.62)
3	5.09 (1.60)	4.91 (1.15)	6.00 (.82)	4.50 (1.37)	3.68 (1.46)
4	5.53 (1.50)	5.16 (1.26)	5.74 (1.20)	4.95 (1.51)	3.21 (1.55)
5	5.79 (.98)	5.25 (1.07)	5.54 (1.14)	5.38 (.92)	3.00 (1.41)
6	2.26 (1.25)	3.00 (1.04)	5.30 (1.06)	4.57 (1.16)	4.13 (1.58)
7	1.88 (1.11)	3.00 (1.12)	4.76 (1.30)	4.76 (1.09)	5.12 (1.36)
8	1.63 (.96)	2.89 (1.24)	4.74 (1.28)	4.89 (1.33)	4.47 (1.61)
9	2.13 (1.49)	2.91 (1.13)	4.74 (1.42)	5.00 (1.28)	5.61 (1.23)
10	1.43 (.75)	2.57 (1.50)	5.19 (.87)	4.62 (1.32)	5.71 (.96)

ィブな記事は、全体的に望ましくない内容の記事であると判断されていた ($M=1.88, SD=1.17$).

記事で描かれた人物の国籍 ポジティブな記事およびネガティブな記事で描かれた人物の国籍として選択された割合を Figure 1 に示す. 記事内容の望ましさに関わらず, 記事で描かれた人物の国籍として“日本”が最も多く選択された (ポジティブな記事: 98.1%; ネガティブな記事: 72.8%). 日本以外の国籍では, 内容の望ましさによって選択される国籍の傾向に違いがみられた. ポジティブな記事における人物の国籍として, “韓国 (44.7%)” “アメリカ (35.0%)” “中国 (32.0

%)” の選択率が高かった. 一方, ネガティブな記事における人物の国籍として, “フィリピン (59.2%)” “中国 (42.7%)” “ブラジル (33.0%)” の選択率が他の外国籍に比べて高かった.

記事で描かれた人物の職業 ポジティブな記事およびネガティブな記事で描かれた人物の職業として選択された割合を Figure 2 に示す. ポジティブな記事で描かれた人物の職業として選択率が最も高かったのは“会社員”の 67.0% であった. 次いで, “学生 (35.9%)” “教員 (24.3%)” “警察官 (22.3%)” “土木作業員 (20.4%)” であった. 一方, ネガティブな記事で描かれた

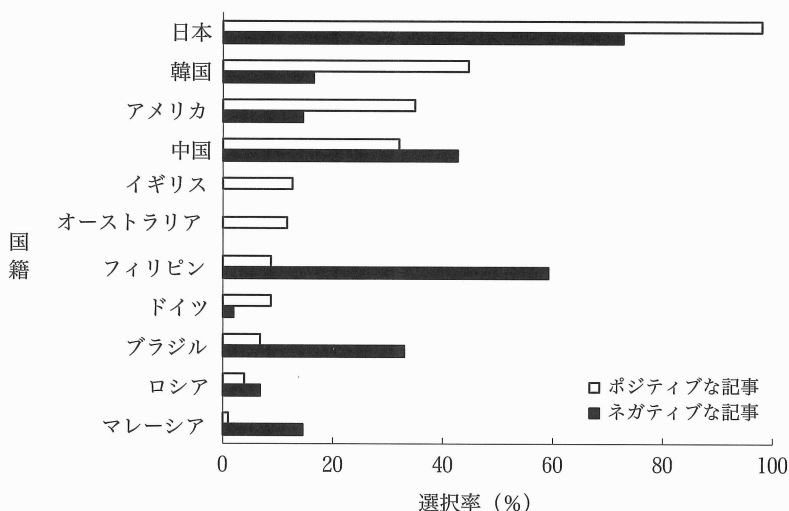


Figure 1 ポジティブな記事およびネガティブな記事で示された人物の国籍として選択された割合 (制限複数回答形式; $N = 103$)

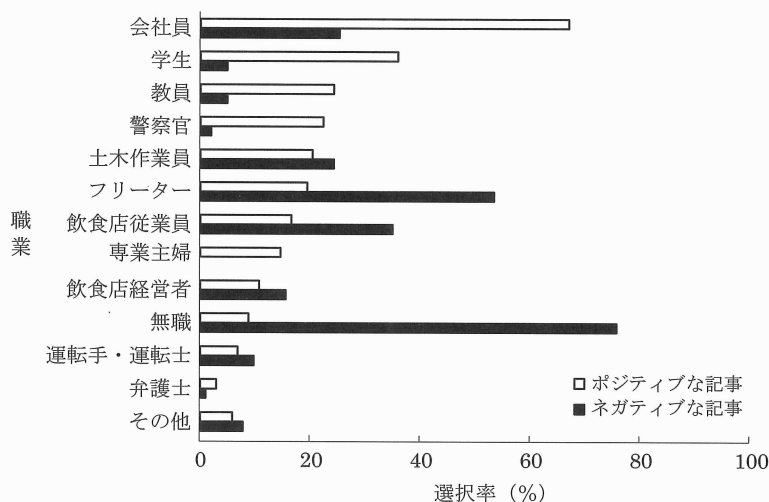


Figure 2 ポジティブな記事およびネガティブな記事で示された人物の職業として選択された割合 (制限複数回答形式; $N=103$)

人物の職業として最も選択されたのが、“無職（75.7%）”であった。次いで、“フリーター（53.4%）”“飲食店従業員（35.0%）”“土木作業員（24.3%）”の選択率が高かった。

考 察

本研究は、望ましい事象（e.g., ボランティア活動, 人命救助）や望ましくない事象（e.g., 殺人, 傷害）を示すニュース記事で描かれる人物にあてはめられやすい社会集団や社会的カテゴリー（i.e., 国籍と職業）について探索的に検討することを目的とした。

選定された記事の内容について 本研究で用いられたポジティブな記事5件、ネガティブな記事5件の計10件の内容について、事象の望ましさ、記事を読んで感じた快—不快の程度、記事内容の理解のしやすさ、事象が社会において重要なことと思われる程度、類似した事象の社会における生起頻度の5つの観点について着目した。その結果、事象の望ましさについては、ポジティブな記事では全体的に望ましい事象を描いた記事として評価され、ネガティブな記事では全体的に望ましくない事象を描いた記事として評価されていた。快—不快の程度については、ネガティブな記事による違いはみられなかったが、ポジティブな記事においてはボランティア活動の記事よりも人命救助の記事のほうがより感情を喚起する内容であったといえる。記事内容の理解のしやすさについては、ネガティブな記事による違いはみられなかったが、ポジティブな記事においては事象の状況のイメージしやすさが関わっていたと考えられる。重要と思われる程度については、いずれの記事においても評定に差はみられず、やや重要であると評定されていた。これは、ニュース記事が新聞というメディアによって伝達されるものであり、新聞に対する情報の信頼性によって比較的重要であると評価されたのだろう。最後に、類似した事象の生起頻度について、ポジティブな記事に関しては記事による違いはみられず、いずれもあまり生じていないと評価された。一方、ネガティブな記事に関しては社会において生起している事象であると評定されており、これらはポジティブな事象に比べて生起しやすいと考える傾向があると考えられる（negativity bias; Taylor, 1991）。

人物の国籍イメージ 記事の中で描かれた人物にあてはまると思われた国籍については、記事の望ましさに関わらず日本国籍が最も多くの参加者によって選択

された。日本国籍以外の場合、記事の望ましさによって選択される国籍の傾向が異なった。ポジティブな記事の人物の国籍について選択率が高かったのが韓国、アメリカ、中国であり、ネガティブな記事の人物の国籍について選択率が高かったのがフィリピン、中国、ブラジルであった。ポジティブな事象において多く選択された国籍は、いずれも日本との国交が盛んな国であり、日本人にとって身近に感じられる国であることから、選択されやすくなったかもしれない。したがって、ポジティブな事象と特定の国籍との間の関連性（「〇〇国籍の人は、望ましい行動をとる」）が示されたとは断言できない。ネガティブな事象に関しては、日本と比較して発展途上というイメージをもたれやすい国籍が選ばれやすかった。興味深いことに、ポジティブな事象での国籍として選択されていた中国籍が、ネガティブな事象に関しても多く選択されていた。中国人に対しては「自己主張が強い」「感情的」「気性が激しい」などのネガティブなイメージとともに「人情に厚い」「親しみやすい」というポジティブなイメージが抱かれており（渋谷・テ・李・上瀬・萩原・小城, 2011）、記事で描かれた事象の望ましさによって参照されるイメージが異なっていた可能性が考えられる。

人物の職業イメージ 記事の中で描かれた人物にあてはまると思われた職業については、記事の望ましさによって選択される職業に異なる傾向がみられた。ポジティブな記事の場合、会社員、学生、教員が多く選択されていた。ネガティブな記事の場合、無職、フリーター、飲食店従業員が多く選択されていた。ポジティブな事象に関しては、国籍の場合と同様、読み手にとってイメージしやすい職業が選択されやすかったのかもしれない。一方、ネガティブな事象については、無職、フリーターなどが比較的にネガティブなイメージと結びついていると考えられ、そのようなイメージと事象の望ましさととの連合が強いために選択されやすくなったのかもしれない。

本研究の問題点 望ましさの異なる事象における人物の国籍および職業について、本研究で得られたデータはいずれも記述統計にもとづいたものである。このため、例えば、「ネガティブな事象の人物の職業として、無職やフリーターといった職業が読み手の頭のなかで思い描かれやすい」という結論に至ることはできない。今後は古典的な手続きではあるが、Katz & Braly (1933) や原谷・松山・南 (1959) が用いたチェック・リスト法によって、国籍や職業に対するステレオタイ

プ内容を整理することが必要である。またより厳密に統制された実験的操作による検討も必要であると考えられる。その手段として、プライミング・パラダイムや概念間の連合強度を測定する潜在的連合テスト(Implicit Association Test; Greenwald, McGhee, Schwarz, 1998)などを用いた検討が可能であろう。

引用文献

- Greenwald, A. G., McGhee, J. L., & Schwarz, J. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464–1480.
- 萩原滋 (2007). 大学生のメディア利用と外国認識 一首都圏13大学での調査結果の報告— メディア・コミュニケーション (慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要), **57**, 5–33.
- 萩原滋・小城英子・村山陽・大坪寛子・渋谷明子・志岐裕子 (2010). テレビ視聴の現況と記憶 —ウェブ・モニター調査 (2009年2月) の報告 (1)— メディア・コミュニケーション (慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要), **60**, 5–28.
- 原谷達夫・松山安雄・南寛 (1959). 民族的ステレオタイプと好悪感情についての一考察 教育心理学研究, **8**, 1–7.
- Katz, D., & Braly, K. (1933). Racial stereotypes in one hundred college students. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **28**, 280–290.
- 川上和久 (1994). 日常生活に忍び寄る情報操作〈情報操作の現代的展開Ⅱ〉 情報操作のトリック—その歴史と方法 講談社現代新書 pp. 147–183.
- 諸藤絵美・渡辺洋子 (2011). 生活時間調査からみたメディア利用の現状と変化～2010年国民生活時間調査より～ 放送研究と調査, 2011年6月号, 48–57.
- 岡林春雄 (2009). メディアと人間—認知的社会臨床心理学からのアプローチ 金子書房.
- 渋谷明子・テーシャオープン・李光鎬・上瀬由美子・萩原滋・小城英子 (2011). メディア接触と異文化経験と外国・外国人イメージ—ウェブ・モニター調査 (2010年2月) の報告 (2)— メディア・コミュニケーション (慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要), **61**, 103–125.
- Taylor, S. E. (1991). Asymmetrical effects of positive and negative events: The mobilization- minimization hypothesis. *Psychological Bulletin*, **103**, 67–85.

最終版平成24年7月30日受理

A Exploratory Research on the Character's Image Portrayed in News Stories.

Munehisa KANEDA, Shinichiro OKAMOTO

Abstract

This research aimed to examine the reader's image about the characters portrayed in news stories. One-hundred-three participants were presented with two news stories with high and low levels of desirability; these stories were edited so that the character's personal identities namely his or her name, nationality, and occupation were kept uncertain. After reading each of the stories, participants were asked to respond to the questions about the story (e.g., desirability of the story, ease of comprehension, etc.). In addition they were asked to speculate on the nationality and the occupation that would be well suited to the character's image of the story. Regardless of the desirability of the stories, the nationality most often guessed was "Japanese". However when other nationalities were speculated on, the proportions differed depending on the desirability of the stories. Similarly, the speculations on the occupations differed depending on the desirability of the stories. The causes of these differences were discussed.

Keywords: news stories, characters, nationalities, occupations, stereotype

